

# 10年目のカルテ

■ 循環器内科

経験10年前後の先輩に聴く「医師としてのキャリア」

金子 伸吾医師  
(済生会西条病院 循環器科)

Shingo Kaneko



1996

愛媛大学医学部に入学

愛媛県西条市で生まれ育ち、地元で貢献したいと思って医師を志した。東京で自分を高めたいという思いはあったが、大学は地元に行った方がいいと考え、愛媛大学に進学した。

1年目

東京都立墨東病院に研修医として入る

様々な患者さんが来るニュートラルな病院ということで、公立病院から探した。また、自分なりに「2年間で何を身につけたいか」をイメージしていたので、そのプランに合った教育プログラムを持っている病院を選ぶことを意識した。

2002

3年目

主に病棟を担当し  
心不全の患者さんを診ていた

いわゆる「下積み」の時期であり、カテーテル関連の手技をすることはなかった。

4年目

診断カテーテルの助手につくようになった

2004

2005

5年目

PCIの第一助手につくようになり  
指導医のもとで多くの手技を  
経験するようになる

6年目

PCIの術者としての経験を積む

2006

2007

7年目

年間400例近くのPCIを経験し  
術者としてある程度の自信を  
持てるようになる

10年目

墨東病院を退職

数カ月の準備期間の間に、全国の様々な病院を見学する。  
10月より、済生会西条病院循環器科医長として診療にあたる。

2008

2011

sat fri thu wed tue mon

1 week

対応	これ以外に、月に3〜4回の当直・救急	緊急オペ	(隔週)教育・成果のまとめ	午前 外来 午後 カンファレンス	午後 心カテ処置 術後病状説明	午前 シンチグラフィ 午後 心カテ処置	午後 心カテ処置	午前 心カテ処置	午後 病棟業務	午前 病棟業務	午後 病棟業務	午前 外来
----	--------------------	------	---------------	---------------------	--------------------	------------------------	----------	----------	---------	---------	---------	-------



金子 伸吾  
2002年愛媛大学医学部卒  
2012年4月現在  
恩賜財団済生会西条病院 循環器科医長  
金子先生のブログ  
<http://minintervention.blogspot.jp/>

## 10年目を見据えて

——初めから地元に戻ってくる予定だったのでしょうか？

金子(以下、金)・・・学部時代から、卒業後しばらくは東京で修行をしようと思っていました。全国で通用するレベルの知識や技術を身につけて、地元に戻ろうと。

ちょうど4年くらい前に、この病院の循環器科が閉じてしまい、地元の方からも「戻ってこないか」という話があったんです。カテーターに関する話でも、術者としてある程度自信がついてきた頃で、その頃からこちらに戻る準備を少しずつしてきました。

——平坦な道ではなかったんですね。

金・・・そうですね。墨東病院に入ってから1年目は内科やER(救急診療科)を中心としたジェネラルローテーション、2年目に心臓血管外科、救命センターで研修をしました。3年

## 地元の循環器医療を背負っていく覚悟で。

目によりやく循環器に関わるようになりませんが、1年間は病棟CCU、救急対応業務が中心で、カテ室では外からの見学のみでした。

4年目でやっと診断カテーターに関わるようになり、術者になれたのは5年目です。それからは毎年400例くらいは手がけ、倒れそうなほどに忙しい時もありました。が、その経験が今に繋がっています。

例えば、初期研修がとても役立っていますし、下積みがあったから技術がちゃんと身についたと感じますね。若手が「早く自分でやりたい」と感じるのはわかるのですが、指導する立場になり、「助手として術者の考えをすべて理解できるまで経験して、ようやく術者ができる」と考えるようになりました。

### 環境は自分で作るしかない

——カテーター治療の設備なども充実しているようですが。

金・・・僕がこちらに来るにあたって、病院側もカテーター治療に力を入れようということ、立派な設備を整えて下さいました。墨東病院でも設計に携わった経験を踏まえ、全国の病院のカテ室も見学させてもらって、自分なりに充実した治療環境を作ったという自負はあります。声をかけていただいているから3年が経ち、「10年目には地元の医

療に貢献できるようにしたい」という夢に、やっと辿り着いたという感じですね。

——医師の世界ではまだ若手と言われそうな年齢ですが、自分で環境を切り拓くのはすごいですね。

金・・・ここ愛媛県の東予地区は、隠れた医療過疎地域なんです。救急はもとより、医療機関にかかるという住民意識も不足しています。PCIやPPPI、つまり自分の技術で救える命、QOLがあるなら、その環境を作るしかないということ、取り組んできました。

また、当院は循環器科がしばらく閉じており、治療をサポートできるスタッフもいなかったため、CEや看護師も自分で育てる必要がありました。幸い院内から精鋭メンバーが集まってくれたので、赴任後3か月でコアスタッフは軌道にのりました。心電図もスタッフが自分で読んで、僕に情報提供してくれるんですよ。

——そういう環境作りなども、墨東病院で学んできたんですか？

金・・・もちろん、自分が上の先生から学んだこと、そこで培われたシステムなどを参考にしています。けれど、教えられたわけではなく、自分なりに考えたり、他の病院や他の先生からも学んできました。以前、後輩たちを教えていて感



じることも多かったのですが、大事なことを「教えてもらえる」と思ったら大間違いです。自分から学び取っていくくらいの気持ちでいなければ、主体的に動ける医者になれませんから。

### 今後目指していく姿

——西条病院に循環器科を立ち上げて半年ですが、今後はどんな医師になつていきたいですか？

金・・・夢を語るようですが、ここにちゃんとした循環器病センターを作りたいです。今は一人でやっていますが、一緒にやっていける若い医師にも来て欲しい。カテーターの施術を動画中継できるシステムを作ったり、定期的に東京などからエキスパートに来てもらって勉強会も開いています。レベルの高いものに触れられる環

境を作り、それを発信していくことで、やる気ある若い先生にとって魅力ある病院にしていけない、と思います。今は、夢を語る若い医師があまり多くないので、僕はどんな夢を語ることにしているんです(笑)。

### 医学生へのメッセージ

——最後に、医学生へのメッセージをいただければと思います。

金・・・循環器科の医者としては、やっぱり学生さんに、いわゆる「メジャー科」に来てほしいと思います。大変な部分もありますが、「大変そうだから」と避けることなく、一度は内科や外科で患者さんの命、人生と向き合うという道も考えてほしいと思います。

あとは、市中病院で指導医をした僕自身の経験から言うと、自分から学ぶ姿勢のない研修医は成長しません。大病院や医局には、全員がある程度のレベルまで育てる仕組みがあるのでしようが、市中病院は違います。その代わり、やる気さえあれば、僕のように膨大な症例を経験することもできます。一概には言えないかもしれませんが、市中病院で研修を受ける方は、明確な目標、より強い目的意識と主体的に学ぶ姿勢を持って臨んでほしいですね。